

置き上げ彩色

おきあげさいしき
御影堂内陣台高柱他

ろうそくや香のすずで模様判別もできないほど黒ずんでいた彩色が、平成大修復により美しさを取り戻しました。これを、より荘厳できらびやかに見せているのが、模様を盛り上げ立体感を出す「置き

上げ」と呼ばれる技法です。

通常の置き上げは、厚みを出すのに胡粉（貝殻を粉にした白色の顔料）を筆で何回も塗り重ねます。しかし今回の修復で、御影堂の彩色は一、二回ほどの重ね塗り、通常の置き上げ以上に厚く盛り上げる独特の技法だということがわかりました。

これは、これまで知られていた筆を使った置き上げ技法以外の方法があったという証し。建造物の彩

色としては特異な技法として、平成十六年度文化財修復学会で発表されました。

一般的には、置き上げ部分は剥落やひび割れがしやすいのですが、御影堂の置き上げは、約二百年前に行われた文化年間の大修復時のものが良い状態で残っていました。当時の彩色技術の高さがうかがえます。



置き上げ彩色が施された内陣の台高柱



彫刻欄間

彫刻欄間

ちようしゅうらんま
御影堂内外陣境

御影堂に入ると、まず眼前に飛び込んでくる牡丹を浮き彫りにした彫刻欄間。この内陣と外陣の境にある欄間は、すべて寛永時代の御影堂再建当初のもので、総数は十五枚あります。

一枚の幅は二メートル以上あり、牡丹の彫刻部分は枠から前面に大きく飛び出しているため圧倒的な迫力です。全面に金箔が押され、まばゆいばかりにひかり輝き、堂内の荘厳さを引き立てています。

一枚の欄間には、つばみや、満開状態の牡丹の花を、五つまたは七つ配置。裏向きの花が一つあるので、参拝の折に探してみるのも面白いでしょう。

彫刻部分と枠の部分は別の木材ですが、彫刻部分は一木造りです。

著しい破損がなかったため、平成大修復では枠の部分のみ新たに金箔を押し直し、彫刻部分は汚れをきれいに取り除き、金箔のはがれた部分を補修しました。